

韓統連大阪通信紙

自主

チャジュ

385号

2023年4月号

자주

発行 在日韓国民主統一連合
(韓統連) 大阪本部

〒544-0034

大阪市生野区桃谷3-13-6

TEL06-6711-6377 FAX06-6711-6378

毎月1日発行 購読料 年間3000円

郵便振替 00940-7-314392

民族時報社 大阪支社

検察独裁政権の無能屈辱外交を糾弾する！

～尹錫悦大統領は歴史と民族に謝罪し、即刻退陣しなければならない～

韓国政府は3月6日、強制動員被害者（元徴用工）への賠償金を韓国企業の寄付金で支給するという「解決策」を発表した。「韓日請求権協定は国家を対象にしたものであり、個人の請求権が消滅したものではない」として、三菱などの戦犯企業が被害者個人に損害賠償をすべきとした大法院（最高裁）判決を全面否定した内容だ。

米国は異例にもこの日、バイデン大統領、国務長官、駐韓大使がそれぞれ声明を発表し、韓国政府の発表を「歴史的」だと歓迎し、4月に国賓として招待することを正式発表した。

日本の岸田首相は「歴代内閣の過去の談話を継承する」と発言したが、現政府としてあらためて「反省と謝罪」を表明する事はなかった。

日本の「誠意ある対応」を求め続けてきた文在寅政権を

「無能外交」だと批判してきた尹大統領は、今回の「解決策」は「未来志向のための国力にふさわしい大乗的決断」であると豪語した。しかし、3月16日の韓日首脳会談では日本側の「誠意ある対応」がないどころか「過去の約束をきちんと守るか見守る」と「慰安婦」合意の履行まで迫られる始末だ。グランドバーゲン（大きく与えて大きく得る）どころか、得るものは何もなく「請求書」ばかりもらう結果となった。

加害者が反省しないからと言って、被害者が謝罪の要求を諦めてしまったら、その加害者は永遠に反省しないだろう。日本政府は既存の談話で過去の植民地支配に対する反省を示した事はあるがただの一度も違法であると認めたことはない。

素人外交、無能外交では済まされない、歴史と民族を裏切るとんでもない外交失態、屈辱外交だ

と言わざるをえない。

●「飢え死にしても受け取らない」

「植民地支配の不法性と加害企業の賠償」を明示した韓国大法院の判決は無視された。

韓国はすべて譲歩し、日本は何も出さない方策が「国力にふさわしい大乗的決断」であるとは誰も思わないだろう。「韓国主導の解決策」は詭弁に過ぎない。韓国の財団に賠償支払いを肩代わり

させておきながら、加害当事者は謝罪もせず一円の金も出さない。これで問題が解決したと思う人は、よほど人権感覚がないか一般常識のない人だ。

「あんな汚いお金は飢え死にしても受け取らない」。30年以上も法廷闘争を続けてきた94歳の被害老人の叫び

は歴史の叫びであり、民族の良心の声だ。国が守れなかった被害者をさらに国が泣かすことがあってはならない。国民に深い傷と羞恥心を抱かせた今回の「解決策」は、「未来」の主役の若者にも支持されていない。また在日同胞社会への影響も小さくない。日本が加害の歴史を忘却すれば、日本社会の在日同胞への差別もより再生産されていくだろう。

今回の「解決策」は米国の命令に忠実に従ったものだ。対米追従を強める韓国は、これから日本とともに米国の侵略戦争の前線に立ち、朝鮮半島の戦争の危機をより高めていくだろう。0.7%

（25万票）の僅差で誕生した検察共和国は検察独裁国となり、日本に過去の植民地支配の免罪符を与えてしまった。検察独裁大統領が亡国大統領になる前に、第二のキャンドル革命で尹大統領を退陣させなければならない（隆）



▲屈辱的韓日首脳会談を糾弾する！

【翻訳資料】

なぜ日本の立場を察し、国民は眼中にないのか

～亡国外交審判第4次汎国民大会開かれる～

一方的な強制動員解決法の強行で触発した尹錫悦政府の対日外交に対する批判が継続している。

労働時間改悪と物価暴騰、検察独裁と国家情報院を動員した公安弾圧、戦争危機を煽る韓米日軍事演習などで、人生の危機に追い込まれた労働者・市民の怒りが「このままでは生きられない」という叫び声となって鳴り響いた。

3月25日、ソウル市内各地で労働者・農民・貧民・女性・青年学生をはじめ各界869団体が参加した「尹錫悦政権審判3・25行動の日」が進行され、その後、韓日歴史正義平和行動、6・15南側委員会、共に民主党、進歩党などが共同主催した「尹錫悦政府亡国外交審判！強制動員屈辱解決法廃棄！大法院判決履行！第4次汎国民大会」が開かれ、政権審判の熱気が熱く盛り上がった。

主催側の推算で約2万人の市民が参加した大会では、喪失した国権を回復しようとする「独立軍歌」が響きわたり、独島の運命を心配する「ホンロアリラン」の歌が流れた。



▲「尹錫悦は日本の大統領なのか」と書かれた
プラカードを掲げる大会参加者

第4次汎国民大会参加者は、決議文を通じて「日本政府に見せた誠意の100分の1も韓国国民には見せず、自分たちの外交失敗を覆い隠すために国民と強制労働被害者を障害物として扱っている。一体彼らはどの国の大統領であり、どの国の官僚なのか」と批判した。

続いて「尹大統領は戦犯国家と企業の謝罪と賠償のない第三者弁済は、決して強制動員問題の解決にはならないという国民の声を無視したまま、韓日首脳会談を強行し、大法院判決を否定する姿勢を示し、これに対する解明を要求する国民を排

他的民族主義と反日を叫びながら政治的利益を得ようとする勢力だ」とレッテルを張ったと批判した。

そして参加者たちは▲主権を揺るがし、民主主義を毀損し、恥辱を抱いた尹錫悦大統領は、国民と被害生存者に謝罪せよ。▲歴史の正義を売った亡国外交の責任者 朴振外交部長官、金ソンハン安保室長、金テヒョ外交安保室第1次長は直ちに退けと要求した。

共に民主党の李在明代表は「国民から権力を託された尹錫悦大統領は、今回の韓日首脳会談で与えられるものはたくさんしたが、受け取ったものは何もない」と述べ、韓日首脳会談以後、日本側から出ている独島領有権、「慰安婦」合意履行要求、福島原発汚染水放出の問題などについて明確に説明できない尹錫悦政府の態度を批判し「我が国が過去にとらわれず未来に進むためには、過去を明確に究明し、誤りは誤りを指摘し、被害者には賠償をしなければならない」と強調した。



▲「尹錫悦政権審判」のプラカードを掲げる韓国民衆

これに先立ちこの日、ソウル市内の各地で「尹錫悦政権審判！3・25行動の日」部門別大会を開いた労働者・農民・貧民・女性など各計869団体は午後5時、ソウル市役所前に集結して本大会を開いた後、第4次汎国民大会に合流した。

3・25行動の日参加者は「これが国なのか」「このままでは生きられない。尹錫悦政権を審判しよう」のスローガンのもと、民生破綻と民主失踪、平和破壊の責任を問う5つの要求案を提示した。（韓国インターネット新聞 統一ニュース 3月26日付）

入管法の改悪に反対し、 真の共生、差別のない社会を作ろう！ 韓青大阪生野北支部学習会

韓青大阪生野北支部主催による学習会「入管問題とは何か」が3月25日(土)、東成区民センター(大阪市東成区)で開かれた。

学習会では、金和容(キム・ファヨン)韓青生野北支部委員長が「入管問題は人間の尊厳を侵害する重要な問題なので、しっかり学びましょう」と開会挨拶を行った。

次に、韓青京都本部の姜旼宙(カン・ミンジュ)さんが「入管問題とは何か」をテーマに報告を行った。

姜さんは初めに「2021年に廃案になった入管法改悪案が、今年の通常国会に再提出されそうだ。改悪案では送還拒否の刑罰化を行い、罰則を科して送還を促進させようとしている」と指摘した。

続いて「日本政府は、強制送還を拒否する外国人が増加しているのを法改正をすると説明しているが、実態は日本政府が難民と認めるべき人を認めず、退去強制命令を発布しており、だから送還を拒否する人たちが続出している」と語った。



▲スライドを活用して報告する姜旼宙さん

そして、入管法と入管体制に反対する闘いの歴史を振り返りながら「真の共生や差別のない社会、外国人の権利が保障される社会を作るために、日本人、朝鮮人やニューカマーの外国人全員が入管体制の問題を考え、行動していこう」と訴えた。

報告後は活発な質疑応答が行われ、終了した。



岸田政権はウクライナ情勢を利用して 憲法改正、軍拡を推し進めている 2023年春関西のつどい

岸田政権が日本の軍事大国化を進める中、「とめよう！戦争への道 めざそう！アジアの平和2023春関西のつどい(主催：同実行委員会)」が3月18日(土)、エルシアター(大阪市中央区)で開かれた。

つどいでは、しないさせない戦争協力関西ネットワーク共同代表の中北龍太郎さんが主催者挨拶を行った後、「ウクライナ・改憲・統一教会〜この1年の取材から〜」をテーマに、ジャーナリストの金平茂紀さんが講演を行った。



▲講演する金平茂紀さん(撮影:細川義人)

金平さんは講演を通じ、ロシアのウクライナ侵攻による日本への影響について「憲法改正の動きが活性化し、防衛費の増大、安全保障論の変容などウクライナ情勢を利用して、日本政府は火事場泥棒のようなことをしている」と指摘しながら、「私たちは、このような状況にまでなっていることに怒を感じないといけない」と語った。

そして、原発や放送法の問題など様々な事柄について問題提起をしながら、社会変革をしていくことの重要性を訴えた。

続いて特別アピールとして、大阪の高校生平和大使の中村百花さんが「第25代高校生平和大使活動報告」を行い、「ビリョクだけどもリョクじゃない」をスローガンに、全国の高校生平和大使が継続した活動を行っていることが報告され、最後に平和人権センター代表の米田彰男さんが閉会挨拶を行い終了した。

マイクロアグレッションについて

韓青大阪生野北支部委員長 金和容(キム・ファヨン)

「マイクロアグレッション」とは「悪意のない小さな攻撃」という意味で、日常会話や日常生活での些細な発言や言動で多く見られます。例えば「料理が上手な女の子は女子力が高いね」や「あなたはとてもユニークで、いい意味で日本人らしくないね」とか「B型なのに几帳面だね」など、言った側からしたら悪意がない、もしくは相手を褒めたつもりで言ったけど、言われた側はモヤモヤした気持ちや不快感を抱くなどのことです。

在日韓国・朝鮮人に対しても例外ではありません。私も過去に「在日らしくないね」や「生まれや育ちが日本だから、日本人も在日韓国人も一緒だ」や「在日韓国なんですか？カッコいい！」などと言われ、モヤモヤを抱いたことがあります。

また性関係で言いますと、私が洋菓子店の製造部門に勤めていたとき「女性は将来お嫁に行くから火傷等で体に傷をつけてはいけないので、オープン作業はさせない」と当時の専務に言われたときは心の中では大変腹が立ちました。

これらの発言は悪意がなく、しかも洋菓子店に関しては専務は女性の体を傷つけてはいけないという親心と「女性は将来嫁になるべき」という疑いのない固定概念で発言したので、当時の私は厄介に感じて反論ができませんでした。私はずっとモヤモヤした気持ちを抱えて生きてきました。そして、今から約1年半前にある在日同胞の方から「マイクロアグレッション」を教えてもらったことで、私が今まで言われてきたそれらの発言も「マイクロアグレッション」であったと分かりました。

「マイクロアグレッション」を勉強していくうちに分かった点は、ヘイトスピーチやジェノサイドのような露骨で分かりやすい差別や暴力・殺人行為と違って気づきにくいこと、個人単位で起きるパターンが多いこと、そしてステレオタイプ

(多くの人々に浸透している固定概念や思い込み)や無知によって「マイクロアグレッション」が発生することが多いということです。

「マイクロアグレッション」は、私自身されたり、私が他の人にもしてしまったという罪悪感もあったことから、韓青の盟員にも知ってもらいたいと考え、学習会(討論形式で行った)も開催しました。盟員の中には「マイクロアグレッション」という言葉を初めて聞いたという声もありましたが、知ってた人も、知らなかった人も皆でしっかり討論ができました。



「マイクロアグレッション」についてもっと勉強したいと思った私は、ある講習会に参加し、より詳細に知ることができました。それはマジョリティがマイノリティを抑圧する、性的モノ扱いする、異常者扱いする、見

下している、無知であるなど様々な構造が絡んでいることが分かりました。

さらに個人単位で「マイクロアグレッション」が起こることが多いと前文で書きましたが、社会構造、つまりマクロ(大きな)な状況が背景に関係していることも分かりました。マクロ(大きな)な状況と言いますと、日本社会については歴史修正主義、天皇崇拜、家父長制、新自由主義政策、朝鮮敵視政策、女性差別、LGBTQに対する差別等という問題であり、そして、これらが人々の意識や心に影響を与えて「マイクロアグレッション」が発生するということです。

私は今回「マイクロアグレッション」についての投稿をしましたけど、誰であろうと皆が対等・平等に接することができる世の中にしていくために、これからも社会問題について勉強し人々に共有していきたいです。



原発汚染水の問題

中山 茂

東北大震災から12年、巨大な防潮堤やインフラの整備は進んでいるが、被災者の復興はまだ途上である。そして、何より東京電力福島第1原発の史上空前の原発事故による被災者の帰還は進まず、溶解した核燃料棒(デブリ)は冷やし続けるしかない状態である。溶けた880トンものデブリが、原子炉の底に溜まっている。

130万トンもの汚染水(東電や政府は「処理水」と言っている)が、1000基を越すタンクに貯まっている。2021年4月に、「もう猶予はできない」と、この汚染水の海洋放水が決まった。しかし、地元の漁民をはじめ多くの住民は反対している。韓国でも、この汚染水の海洋投棄が問題になっていると、在日朝鮮人の知り合いから聞いた。当然のことだ。

汚染水の問題は原発事

故の直後から問題になっていた。熊取京大原子炉実験所の元助教の小出裕章さんも、当時から垂れ流しの汚染水を問題にして「100万トンのタンカーを接岸して、汚染水を貯めたらいい」と言っていたが、東電も政府も無視した。汚染したタンカーは、その後使い物にならないからだ。100億円ほどのタンカーが無駄になると東電も政府も投入を渋ったと思うが、今日の事態を考えれば、無責任は明らかだ。

あの頃、いろんな人がアイデアを出していた。私の兄は、建築士で、工場の生産ラインの設計をしていた。震災直後、珍しく電話があり、原子炉に消防のポンプ車から冷却水を注入していたことに腹を立てて、連絡してきたのだ。対処療法的な小手先の対応に頭にきていた。運動とは無縁の企業人だったが、専門家としての正義感があった。小出さんの事を紹介すると、感心していた。そして、自分は循環式の外付けの冷却方式がいいと言ってきた。今の冷却方式と基本的には同じ方法だ。

その後、循環式の冷却方式となり、ここにALPS(多核種除去装置)が取り付けられた。トリチウム以外の64の放射性物質が除去されると言われている。しかし、どれほど除去されるかは不明だ。

汚染水は、雨水や地下水がデブリに触れ、超濃度の放射性物質となっている。この汚染水が外部に出ないように様々な方策が講じられたが、いまだ成功していない。凍土壁も効果がない。結局、東電も政府も、この原始的なタンクに貯める方法しか思いつかなかった。敷地内は、限られている。

数年で満杯になると言われてきた。

しかし、敷地内で満杯ならその他の方法を考えるべきだ。どうして、海洋投棄の話になるのだ。旧ソ連のチェルノブイリ原発事故で



▲汚染水放流反対を訴える韓国民衆

は、原発を「石棺」で覆い、燃料棒の放射能で崩壊熱が

発生するので、絶えず放水し続けている。しかし、福島原発の場合は、燃料棒が溶けているので、冷やすだけでなく、高濃度に汚染されたその水を回収し、処理し、保管しなければならない。

東電と政府は、この汚染水を国際基準まで希釈して(薄めて)、海に流すと言っている。とんでもないことだ。いくら薄めても、元の放射能物質はそのままだ。放水する量は、100万トンだ。薄めた汚染水を、タンクローリー車一台分海に流すのではない。天文学的数値の放射能が、海に流されようとしている。すでに、事故直後に大量の放射性物質が海に流され、水素爆発で核納容器が吹っ飛んだ時に放射性物質が大量に外気に飛び散っている。もう、これ以上、放射性物質を外に出してはいけない。厳重に隔離し、保存しなければならない。途方もない期間、大量の汚染水を管理しなければならない。膨大な資金と人員がいる。しかし、それは、東電と政府の責任である。

【書籍紹介】

「海を抱いて月に眠る」

著者: 深沢湖

出版社: 文春文庫 / 790円 + 税

この小説は解放後、韓国から密入国で渡日した著者の一世の父親と、その家族の葛藤と和解を実話に基づいて書かれた小説です。90歳で亡くなった父は友達も少なく、家では大声で怒鳴り、威張り散らしてばかりで、妻にも二人の子供からも疎まれるそんな一世です。私の父もこの父と同世代で、我が家の場合は父が帰ってくると子どもたちは全員自分の部屋に一目散に退散する家でした。理不尽な一世の父親の姿と家族の気持が手に取るようにわかります。

葬儀後、部屋の片付けで父が残した20冊のノートが発見され、そのノートには韓国での出自、日本での差別と闘いながらも、韓国の民主化と朝鮮半島の統一を願った父の人生が綴られています。そして、往々にして一世は家族への感謝を伝えることができず、家族の中で誤解と無用な喧嘩を巻き起こしますが、このノートには家族には伝えきれなかった時々の感謝の言葉も吐露されています。

私は1978年在日韓国青年同盟(韓青)に入りました。その時に先輩から韓青の歴史を聞きましたが、この小説の中には、その時聞いた話が実話としてそのまま出てきて本当にびっくりしました。まさか深沢さんの父親が私の先輩であったとは信じられない奇遇です。

著者の父は1960年4・19学生革命を契機に設立された韓青の幹部であったこと。61年朴正熙の軍事クーデターに反対し、在日本大韓民国居留民団(民団)とたもとを分かったこと。72年の7・4南北共同声明支持大会を朝鮮総連と共に開催したこと。73年の金大中氏との出会いと

拉致事件、その1週間後の韓国民主回復統一促進国民会議(韓民統)設立など、在日同胞の民主化、統一運動に果たした功績はとてつもなく大きく、一世の民族に対する強い愛情と立派な祖国を作るのだという矜持がこの小説の大きな柱となり、この様な在日がいたことを小説の形で表現されたことに感謝が絶えません。

非常勤でありながら全国でカンパ活動を行い、仲間を励まし運動の先頭に走ってきました。しかし、家族からは病弱な子どもを抱え「家族と運動とどちらが大切なんだ」と責められ、仕事に専念し活動の一線からは退くこととなります。

その後、病気で伏せる母親に会うため韓国大使館から運動から身を引くことを条件に旅券を手に入れ、30年ぶりに母親、兄弟親族と会い晩年を過ごします。

父には3つの名前があり、1つ目は本名の李相周、2つ目は日本での登録名文徳允、3つ目は通名の文山徳允。理不尽で差別に満ちた日本で親族のいない孤独と立ち向かいながら生きてきた父を、著者は兄と父の友人で密航がばれて韓国へ強制送還となり、獄中で亡くなった友人の娘と3人で韓国に分骨のために訪れます。父の親族に出会いそれまでであった父へのわだかまりや怒り、知らなかった父の素顔と出会い心が洗われる様子は私も経験しました。

朝鮮半島と日本。玄界灘の海を挟み海に抱かれながら両方を行き来した父。日本で見ている月を母も見ているはずだと母への寂寥を募らせ月と共に眠る父。題名も良すぎですね。(源)



第28回統一マダン生野からのお知らせ

昨年3年ぶりに開催しました統一マダン生野。例年6月に開催していましたが、今年は日時・場所を下記に変更して開催することになりましたので、お知らせします。

第28回統一マダン生野

日時: 9月17日(日) 正午～ / 会場: いくのパーク(大阪市立御幸森小学校跡地)

